

ポイント 短歌の文法

第三回

安田

純生^{すみお}

「鳴かなくなりぬ」は？

私の住む大阪府箕面市や、その近辺の地域の話しことばでは「鳴かない」の意で「鳴かへん」「鳴けへん」、あるいは「鳴かん」といいます。しかし、親しい者同士の会話で、そういうことばを用いる人でも、改まったときの会話や文章では「鳴かない」を用いる場合が多いようです。たとえば、朝、鳥の声が聞こえないことに気付いた男が、妻とか息子とかに「今朝は鳥が鳴けへんなあ」といったとします。しかし、外へ出て知人に会おうと、同じ男が「今朝は鳥が鳴かないのです」といったりする。これは、「鳴かない」が現代語の標準の形だと意識され、「鳴けへん」が砕けた話しことばと意識されているからです。

文語体の短歌を作っている人でも、ものごとをことばで捉えたり、考えごとをしたりするときには、頭の中で日常のことばを用いているはずで、文語体でものごとを捉えたり、文語体で考えごとをしたりするのは難しく、それができる人は、たぶん、ごくわずかでしよう。つまり、文語体で歌を詠む作者も、多くは、まず日常のことばで表現を思い浮かべ、それを文語の形に翻訳しているの

す。鳥が鳴かないことに気付いた作者は、「鳴けへん」とか「鳴かない」とか認識します。しかし「鳴けへん」「鳴かない」は文語の言い方ではないので、それを文語に翻訳しようとするのです。いうまでもなく、そういう意の文語表現は「鳴かず」となりますし、「鳴かない」が名詞にかかる場合は「鳴かぬ何々」ですから、「鳥鳴かず」「鳴かぬ鳥」などと表現するのです。

それでは、「今は鳴かなくなった」（大阪の話しことばなら「今は鳴けへんようになった」でしよう）の「鳴かなくなった」を文語で表現すれば、どういう形になるのでしょうか。「なった」が、いかにも現代語風ですから、これを「なりぬ」に置き換えると「鳴かなくなりぬ」となります。「鳴かなくなりぬ」、これで、いちおう文語表現になったような感じもします。しかし、なかには「鳴かなく」の「なく」に落ち着きの悪さを抱く人がいるかもしれません。

そこで、平安時代の和歌では、どうなっているかを見ましましょう。平安時代の都のことばの体系が、すなわち文語です。たとえば紀貫之の家集『貫之集』に次のような歌が見出せます。

暮れぬとて鳴かずなりぬる鶯の声のうちにや春は経ぬらん
一首の大意をいえば「今、季節が暮れたというので鳴かなくなりた鶯。その声のしている間に春は過ぎてしまったのだろう」となりましようか。このように文語では、「鳴かなくなりぬ」ではなく「鳴かずなりぬ」といつていたのです。

もう一つ例をあげておきます。今度は、新古今時代の歌人、藤原秀能の作品です。

さを鹿も鳴かずなりぬる山里のあらしのこゑも似る物ぞなき

『如願法師集』

「(秋には、あんなに鳴いていた) 牡鹿も鳴かなくなった山里の嵐の音。その音も、似るものないほどに寂しい」というような歌意ですが、ここでも「鳴かなくなりぬ」といつています。同様に、現代語の「行かなくなった」や「咲かなくなった」は、

紀貫之「後撰集」巻四

花も散りほととぎすさへいぬるまで君にも行かずなりにけるかな

藤原実方「新古今集」巻十六

八重ながら色も変はらぬ山吹のなど九重に咲かずなりにしのごとく、文語では「行かずなりぬ」「咲かずなりぬ」となりました。「なりにける」「なりにし」の「に」は「ぬ」の連用形です。その「に」に、前者では、詠嘆を示す「けるかな」が添えられ、後者では、山吹が九重、すなわち宮中に咲かなくなったこと(天皇の退位を比喻しています)が少し前からの状態なので、過去回想の助動詞「し」が添えられています。

これらの例からもわかりますように、現代語ですと動詞に「なく」を続けて「……なくなる」と表現する言い方は、文語では「ず」を続けて「……ずなる」とするのが普通であったのです。「鳴かなくなる」「行かなくなる」の「なく」は、助動詞の「ない」の連用形ですが、この助動詞の「ない」自体、歴史の新しい語でして、文語には存在しません。それで「……なくなる」も存在しなかったのです。ただし、誤解のないように述べておきますが、同じ「なくなる」でも、

恋しとも今は思はずたましひの相見ぬさきになくなりぬれば

「藤原興風集」

という言い方は文語の中がありました。「あなたのことを恋しいと

今は思わない。何しろ、あなたと逢わない前に、私の魂は恋い焦がれて無くなってしまったので」といった歌意で、「なくなりぬ」といつていますが、この「なく」は、「鳴かなく」「行かなく」のように動詞に添えられたものではありません。助動詞の「なく」ではなく、形容詞の「なく」なのです。

助動詞だ、形容詞だとわづらわしいことですが、「鳴かなくなる」と「魂がなくなる」との「なくなる」の違いはおわかりいただけるかと思えます。

ちなみに、近代以降の短歌の文語体表現には、「……ずなる」とせずに「……なくなる」としたものも出て来ます。「見えなくなりぬ」「来なくなりたり」「出でなくなりし」「利かなくなりぬ」などの表現が、けっして珍しくありません。こういう表現は、現代語と文語をませこせにした表現といえましょう。「見えずなりぬ」「来ずなりたり」「出でずなりし」「利かずなれる」とすれば、文語の体系と矛盾しない言い方になります。もつとも、ませこせにして悪いということはないでしょうし、この種の混合表現は近代の文語体で多々見られます。それらには、作者が意図的にそう表現したケースもあるでしょうし、意図的ではなく、結果的に、そうなってしまうケースもあるでしょう。ご参考までに、近代の短歌から「啼かなくなれり」の例をあげておきます。

梟は啼かなくなれりまね声の拙くぞひびく町中にして

土屋文明「ふゆくさ」

未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
ず	ず	ず	ぬ	ね	ざれ

やすだ・すみお●昭和22年、大阪生まれ。箕面市在住。「白珠」代表。著書に「歌集の森」、歌集に「でで虫の歌」など。